

はじめに

本報告書は、千葉大学大学院人文公共学府後期課程研究プロジェクト「多言語多文化社会におけるコミュニケーションの多様性」(2023年度)の1年間の成果をまとめたものである。これまで刊行されてきた「接触場面の言語管理研究」のシリーズとしては20冊目にあたる。

グローバル化とともに、日本社会の様々な場面で多言語化多文化化が進行している。ICTの急速な普及とも相俟って、人々のコミュニケーションのあり方、言語学習のあり方は多様化していると考えられる。本プロジェクトは、こうした現代日本の状況を踏まえ、多言語多文化社会におけるコミュニケーションの実態を、多角的に明らかにしようとするものである。

研究論文は、以下の3本である。

まず、湯論文は、雑談をめぐる研究の現状と課題をまとめたものである。雑談の定義、機能、構造に関する先行研究や日本語学習者に対する雑談教育の知見を整理するとともに、多言語多文化社会において雑談が果たす機能や雑談の参加者が直面する課題を解明する必要があると論じている。

次の村岡論文は、日本語教育研究における教室研究の意義を確認した上で、教授者による1人称「わたし」の使用の分析を通じて、教授者の規範的な話者役割とそれとは異なる役割・参加構造の可能性を指摘した。そして、「わたし」を多用する教授者の授業データとインタビューをもとに、教師の実践知が、教室における教師の役割、参加構造に与える影響を明らかにした。こうした分析をもとに、規範的な役割と非規範的な役割を柔軟にシフトすることが教師の重要な実践知であると主張している。

横須賀・今・大場・中山論文は、言語管理研究会のメンバーである4名の研究者による共著論文である。オンラインによる日本語授業の経験が、学習活動、授業の流れ、インターアクション能力にどのように影響したかを、教師と学習者それぞれの視点から検討している。オンライン授業の好ましくない影響を指摘するとともに、ICTを組み入れた授業においても、教室文化的、社会文化的文脈における他者の存在を認識して他者とのコミュニケーションを涵養することが必要であると述べている。

研究ノートは、以下の3本である。

村岡論文は、初対面とは異なる、すでに関係性を構築している参加者が会うとき、その関係性の確認と情報の更新はどのような相互行為によって行われているかを、「日本語日常会話コーパス(CEJC)」を用いてマルチモーダルに分析したものである。情報共有のための場のリソースの活用の実態を明らかにするとともに、同調的なやりとりが人間関係の再構築にとって不可欠とは言えず、むしろそれが基盤化プロセスにおいて一定の意味を持つことを指摘している。

高論文は、中国帰国者を事例として、居住する団地という住環境とコミュニティに注目しながら、文字を介してどのようにコミュニケーションを行っているか、また自らのよみかきをどのように認識しているかを、実態調査とインタビューをもとに考察している。異なる世代の相違点のみならず、よみかき実践に向かう言語管理の共通点を明らかにしており、他の外国人住民のよみかき実践や言語問題、支援課題を考える上でも重要な示唆を示すものとなっている。

高橋論文は、職場におけるからかいを取り上げ、からかい、からかいの応答に続く、3番目の発話がどのような機能を果たしているかを観察している。分析事例において、連鎖を閉じる3番

目の発話で、からかい手はからかいの受け手に対して解決を与えたり、受け手が述べていることに理解を示したりしていた。そこには、職場の会話特有の、からかい連鎖の早期終了への志向、相手のフェイスへの配慮があると推察している。

調査報告の一本目は、千葉大学に在籍する留学生の日本語学習に関するニーズ調査の結果をまとめたもので、博士後期課程在籍者、および博士前期課程在籍者・修了者の10名の共著である。アンケートとインタビューをもとに、レポートや論文を「書く」能力、「友達作り」や「研究室でのやり取り」に役立つ支援が必要であると結論づけている。

調査報告の二本目である吉野・高・西住の報告は、日本の大学1年生を対象に、入学前の異文化間移動の経験、第一言語や第二言語の学習経験と自己評価、海外留学に対する意識についてアンケートで調べた結果を報告している。海外留学が必須の大学生が、入学から卒業までの間にどのような教育を受け、どのような接触経験をし、それらがコミュニケーションのあり方、言語意識、言語使用意識にどう影響するか、通時的に明らかにしようとする研究の一環である。

報告書の最後には、2023年4月から2024年3月までの言語管理研究会の活動報告を掲載している。長らく言語管理研究会をけん引し、千葉大学において多くの優秀な研究者を育ててこられた村岡英裕先生は、2024年3月をもって定年退職を迎えられる。本報告書の研究ノートに補遺として記された「接触場面研究のためのメモ」は、今後の接触場面研究の発展の可能性、方向性を考える上で、貴重な示唆となるであろう。

なお、本研究プロジェクト報告書からの部分的な引用に関しては、すでに著者の了解が得られている。

2024年2月29日

研究プロジェクト代表 吉野文